

マーガレット・カーン著

『精霊の子供たち——クルド人
とその社会——』

Margaret Kahn, *Children of the Jinn: In Search of the Kurds and their Country*, New York, Seaview Books, 1980, 302 p.

I

何世紀も昔にソロモン国王は、ジン(Jinn)と呼ばれる精霊(魔精)500人を王国から追放した。追放されたジンはまずヨーロッパに飛び、そこで500人の美しい娘を花嫁としてさらった。そして、彼らはイラン西南部からトルコ東部に伸びるザグロス山中に住み始めたのである。これは、色白で金髪というヨーロッパ人の風貌を持つクルド人の出自伝説の一つであり、本書の冒頭でも語られている。

今日イランのザグロス山中に住み、周辺のアラブ人、トルコ人、ペルシャ人との通婚を拒否して生活を営む「ジンの子供たち」、つまり、クルド人とその社会を描いた書が本書である。

少数民族人権グループ刊行、「クルド人」(Report No. 23)に引用されているクルド人口は、大きめの数字で約1500万人である。彼らはトルコに800万人、イランに350万人、イラクに250万人、さらにシリアに60万人、ソ連に30万人と中東諸国に分散して生活しているのである。

クルド人たちは恒常的といつてよいほどいつも、部族間で戦ってきたし、また、周辺の大国に抵抗して戦ってきたのであった。第一次世界大戦でオスマン朝が敗北し、その戦後処理を定めたセーブル条約(1920年)では、トルコ領内にクルド人国家の樹立が認められた。しかし、トルコ革命によって現われたケマル・アタチュルクが、クルド人国家の樹立はトルコ分割計画であると強く反対した。このため、23年のローザンヌ条約ではクルド部族内の戦いを理由に、統一国家樹立の約束は反故にされたのである。

これ以降もクルド人を抱える各国政府は、いわば彼らを鬼子として扱ってきた。トルコではアタチュルク時代に多数のクルド人(25万人—評者注)が殺され、その後も抑圧されてきた。イラクでは、中央政府の力が弱かったためにクルド人はたびたび反乱を企てた。けれども勝

利は得られず、行き詰まり状態にあった。イランでは、国王体制下でクルド語を書くことが禁止され、何よりも強力な秘密警察の厳しい監視下にあった。本書の表現を用いれば、クルド地域の中心、「マハバードでの人の死は、決して自然なものでも偶然的なものでもない」(p.40)といわれたほどであった。

言語学者である著者、マーガレット・カーンは1974~75年にクルド地域の一都市、人口15万人、外国人50人と いわれるレザイエ(76年センサスでは同市人口10万人以下—評者注)に夫と滞在した。その間、クルド語を習得し、クルド民話を収集し、その結果をまとめて76年にはPh.Dを得たのである。彼女は78年夏にも同地域を短期間であったが再訪した。この二度のクルド地域滞在の体験を、著者は本書で描いたのである。

イラン政府は、著者のような外国人がクルド人と接触することを好まなかったし、それだけでなく、レザイエに住むベルシャ系、トルコ系のイラン人も奇異の目で著者夫婦を見ていた。このようにタブー視されるクルド人への接近を試みる過程で、非クルド系イラン人やクルド系イラン人の「偽りの助言や疑い深い沈黙」に、著者は直面せざるをえなかった。とはいえ、徐々に調査も進んでいったのである。この経緯が、本書の第I部「クルデスターンの外側で」(第1~6章)、第II部「クルデスターンの周辺で」(第7~13章)、第III部「クルデスターンの内側で」(第14~18章)に分けて描かれている。

調査に絡んで現われた多くのクルド人の人となりや生活を、最小限のクルド史の解説を加えて描いた本書は、この手法のゆえに、われわれにはなじみの薄いクルド人の生活風習やクルド社会の構造を、生き生きと伝えることに成功している。既存の文献はイランのクルド族に関しては少ないし、たとえあっても、それらは1946年のクルド自治共和国の成立前後や、60年代初めまでの政治史を記述するのに終始している。これに対し75年前後から78年という最近のクルド社会を描いた本書は、それだけでも貴重なものであるといえよう。

革命後のイランにおいて、クルド族の自治権拡大運動は、47年の自治共和国の崩壊後初めて成果といえるものを手にした。クルド人は今日、反ホメイニ勢力のうちで装備が最も良く、最も訓練されているという。クルド族の動向は、中央に対する地方の自律化を促進したり、イラン神権政治体制の勢力範囲を事実上制限することになる。それだけでなく、クルド族の動向は、中東諸国における国境設定の人為性や、多人種・多宗派の集団から

なる中東諸国のモザイク性とその問題を、はっきりと浮び上らせることになろう。このように、中東地域で少数民族（マイノリティ）への関心が高まらざるをえないという状況の中で、中東最大の少数民族を内側から描いた本書の持つ意味は大きい。

なお、本書を紹介するにあたって評者は次の方法をとった。まず、クルド人や社会の諸状況を明らかにするとされる主要な登場人物を選び、便宜的に番号をふり、彼らの行動やライフ・ヒストリーをそれぞれ描くことにした。というのも、文化人類学的なこうした報告を、社会的に利用するには、著者以上に読者自らが登場人物を再構成し、報告された社会をそれによって理解するための枠組を見出すことが必要と思われるからである。

II

著者と夫ジャリードは、レザイエでも比較的豊かな人々が住む小路（クーチェ）に居を構えた。しかし、著者はクルド人と思いどおりの接触ができないため、いらだっている。この経緯が第Ⅰ部「クルデスターンの外側で」に描かれている。

〔登場人物1〕 ジャファリー家の人々。一階に住む家主で、主人は政府系の建設業者。この3年間(72~75年)に多くの富を手にし、家を改築した。しかし、酒も飲むので善良なイスラム教徒とは誰も見ていない。夫人は「ベファルマイード（どうぞ）」を連発するが、それはただの挨拶なのであり、著者はたびたび本気にして欺かれている。

〔登場人物2〕 アシベ・クルド放送部長。著者は紹介状を持ってレザイエ放送局所長を訪れた。ここはクルド語放送を通じて、国王の政策を宣伝する放送局である。紹介状のお陰で、クルド人とペルシャ人の混血のアシベ部長が著者の語学教師に任命された。しばらくして、農村への小旅行のときアシベは「月にいくら稼いでいるか」と露骨な質問をした。著者の夫が「ファズール（おせっかい）」と言って、アシベの面子をつぶしてしまった。気まずさが続く中で、彼は自分が秘密警察の一員であると明かし、夫を威圧しにかかったのである。旅行後、放送局での語学教育は中止となった。

とはいえ、放送局員ハリリ(後述)は、職場外では「アシベが誤っている」と言ってくれる。なぜなら、「その家の客はもはや敵ではない」というクルド人の掟を、アシベが破っているからだと説明した。

〔登場人物3〕ハリリ。上述した人で放送局では、農業

改善の番組を担当している。話しを聞いていると、投獄され拷問された経験がありそうである。ロミオとジュリエットのクルド版というべき「マンとズィーン」のコピーを内緒でくれたりする。そして、彼の協力で著者はクルドの農村、マバナ村を訪問できた。ここは、北部クルド地域で最も豊かな村で、クルド自治共和国の頃から国王派であった一部族が住み、何かと政府から優遇されている村である。それでも泥だけでできた貧しい村である。

〔登場人物4〕 パルバーネ(15歳)とシリーン(14歳)。マバナ村の所有主である族長の娘たち。彼女らは、洗濯や食事の準備のために多くの召使いが家にいると言って、著者を驚かせた。ただし、召使いは、着るものの点で家の成員と差はないし、クルド人はクルド人以外の家庭では働かないという。パルバーネの結婚式の話しになると、彼女は「結婚なんかしない」と強く否定して怒ってしまった。彼女が2人の妻を持つ、つんぼの老人と結婚したことを後で著者は知って、「結婚なんかしない」と叫んだ彼女の気持ちを了解したのである。その後、パルバーネがこの結婚のため、夫についてイラクに行ったと聞いて(第Ⅲ部17章)、彼女へ同情の念を著者は一層強めたのである。

〔登場人物5〕 ハッサンとその兄。50年頃にハッサンの兄(当時13歳)は、竊動文書を持っていたと、家に放水されて肺を病むことになった。彼はアメリカ留学中に不可解な死に方をした。アメリカでハッサンを知っていた著者は、彼らの故郷マハバードを訪問し、その家族に電話をかけた。すると、秘密警察らしいハッサンには似ていない男がやってきたのである。

なお、第Ⅰ部で著者は、イスラム女性が体を被うチャードルとクルド人との関係も考察している。

クルド族は、中東で女がチャードルを着けない数少ないイスラム教徒の集団である。ところが、これはクルド族内での女性の地位が高いからではない。クルド族の女がチャードルを着ける程度は、家族の持つ富と町への接触度によっているのである。レザイエの町に住む金持のクルド人、イラクからの難民でも将軍やクルド民主党指導者の妻や娘は、イラン風のチャードルを着けている。一般に貧しい女は、町でもせいぜい金貨の縁飾りの小布(フィスタン)を頭に被るだけである。また、トルコ人やイラン人のいない農村やマハバードの町では、チャードルは着けないという。

III

ハリリ（登場人物3）の協力を得て、重要なクルド人を知り、徐々にクルド社会に接近してゆく経緯が、第II部「クルドスターンの周辺で」に描かれている。

〔登場人物6〕 マルヤム夫人。レザイエの大通りにある家の主婦。著者はハリリの紹介で知った。マルヤムはハッジ・イスマエル（後述、登場人物10）の5人の妻の一人。彼女は3人の息子を持ち、その嫁を息子の嫁とはいわず、「私の嫁」と呼ぶ。つまり、クルド地域では嫁は夫の家族、とくに夫の母の所有物とみなされているのである。2人の嫁は、クルド地域で一般的な結婚の型である「父方の兄弟の娘」ではなく「よそ者」である。同じ「よそ者」でも長男ターハの妻ハディジャ（後述、登場人物7）は正式の結婚の手続きを踏んでいるが、次男マスードの妻ナディアはかけ落ちによる結婚である。クルド社会ではかけ落ちは、結婚の方式として認められている。けれども、マルヤム夫人は、息子が16歳でかけ落ちして結婚し、高校も卒業できなかったと不満を隠さない。このためか、ナディアは町の家にいると、マルヤム夫人の召使といった方が良いほどである。パン焼きから料理用のぶどうの葉の塩づけなど、家事全部をさせられている。

マルヤム夫人（第2妻）の外に、夫ハッジ・イスマエル（登場人物10）にはスーサン（第1妻）、ゼイナブ（第3妻）という「貴族の家」の出自の老妻がいる。これとは別に、下層の家の出自の若い妻2人がいるし、さらに、ハッジは第5妻の妹を第6妻にしようとしてさえしているのである。この中で、第1妻のスーサン〔アイシャ（登場人物8）の母、後述〕は、かつて彼女の父が老人との結婚を決めたので、マスードの妻ナディアと同じように、13歳のときハッジとかけ落ちして結婚したのだった。今日病気がちのスーサンは、農村の家（第III部14章、後述）から出たいのだが、息子がいないのでそれゆえ「自分の嫁」を持って独立できず、ハッジの若い妻の世話に頼らねばならないのである。

〔登場人物7〕 ハディジャ。マルヤム夫人（登場人物6）の長男の嫁。彼女の夫は24歳だが兵役もあって、まだ高校2年生。父の財産を利用できる特権を持つけれども、父から独立する術はない。ハディジャの結婚は政略結婚であり、10年前まで戦ってきた敵の一族の、写真すら見たことのない男のところへ、イラク領内に住む両親の村から彼女はきたのである。ただし、結婚式は「車100台が集まるほど」盛大であったという。

クルド族の習慣では、結婚後1年を経ても夫の許可がないと、実家を訪問できない。ただ彼女の両親は有力者のため、夏には妹をイラクからハディジャの所へ送ってきたのである。その後（第III部18章）、実家の縁者に不幸があって実家を訪れることになった。このとき婚家は、いかに嫁を大切にしているか示すため、菓子や織物など山のようなみやげをもたせた。こんな関係が実家と婚家の間に見られるのである。

〔登場人物8〕 アイシャ。ハッジと第1妻スーサン（前述）との娘。大きな家に住み、競争すべき別の妻もいないし、上等の服を着て自分で使える金も多く持っている。彼女の夫はクルド族でも超一流の家のシャイフ・アブディラである。しかし、夫はアイシャの父であるハッジのいとこで、父よりも年寄である。

〔登場人物9〕 シャイフ・アブディラ（アイシャの夫）。アブディラの父は、アタチュルク時代になされたクルド族の弾圧のため、トルコに所有していた財産を捨てて、イラクに逃亡した。それでもイラクやイランに多数の村を所有するほどの有力者であった。アブディラはバグダッドの士官学校を卒業し、46年のクルド共和国樹立のときに、バルザーニとともにイラクからイランにきた。共和国の崩壊後バルザーニとともにソ連に亡命したが、スターリン体制下で2年シベリアに抑留され、その後ソ連人の娘と結婚した。58年のイラクのクーデターで、妻子をソ連に置いたままイラクに戻った。その後イラク政府と戦うことになり、「古い族長の利益を守る」と評されたバルザーニ派のうちの左派に彼は位置した。しかし、祖先はマホメットとされるセイエドであって、彼は宗教的権威も備え信望上厚かった。そのためもあってバルザーニに追われ、父がすでに住んでいたイランに移ってきた。イランでは秘密警察の目が光っていたが、「地方のムッラー（僧）やクルド人指導者」が指示を仰ぎにきたし、難民も彼を頼ってやってきた。だから、彼の妻アイシャは、非合法文書の「イラク・クルド革命カレンダー」を著者に与えることができたのである。

〔登場人物10〕 ハッジ・イスマエル（登場人物アイシャの父）。ハッジの祖父と父はアタチュルク時代に処刑され、父の2人の妻の一人はイスタンブールへ、もう一人はイランに逃げた。今日5万人のクルド人がいるイスタンブールに住む兄弟は、クルド語が話せないという。また、著者たちが東部トルコを旅行したとき、ところどころでハッジ・イスマエルを知っているかと聞かれ、彼の力に驚いている。

第Ⅱ部「クルDESTAーンの周辺で」の各章で示されたように、クルド人の有力者と著者が接触し始めた時期に、イラン・イラク両国は75年アルジェ協定を結び、和平が成立した。パーレヴィ国王は、対イラク政策の一環としてイラクのクルド族の自治権拡大運動を支援してきたが、75年以降政策を一変させた。イラクからのクルド人難民用の難民学校は閉鎖されると伝えられ、また今イラクに戻らなければ国境は閉鎖されて、将来帰国は無理とも伝えられたのである。難民の間に帰国するかどうかで生じた大きな動揺を、著者は見逃さなかった。けれども帰国した一部の人がイラクで処刑されたことが伝わると、多くの難民は帰国を見送ることにした。とはいえ、この難民学校の運営への、イラン政府の締めつけは強まってきたのである。

IV

第Ⅲ部「クルDESTAーンの内側で」では、クルド的なものが根強く残っていると期待してきたクルドの農村で著者が詳しく見たことが記述されている。第Ⅰ、Ⅱ部での登場人物について第Ⅲ部で記述された事柄でも、この書評ではそれぞれの人物の項ですでに述べておいた。このためこの節では、著者の見たクルド農村を再現するにとどめたい。

〔A村の場合〕 ハッジ・イスマエル(登場人物10)の持ち村。昔ながらの土の家と土の壁から村はでき、家畜の糞を丸めた燃料を用いている。ハッジの家は丘の上であり、6メートルの壁で女たちの住むハーレムと、村人らが集まってくる細長い居間(ディーバン・ハーネ)に分かれている。家の内庭ではゴミが土に混ざり、家にはノミやハエも多い。ハッジは快適な生活を追求するわけでもなく、貧しい多くの農民とほとんど同じ生活をしている。確かに、コンバインやランドローバーを持つてはいるが、それでもハッジは昔ながらの無償の労働供与を農民に求めている。部族民に対する族長として従来からの生活を維持しているため、農民の方でもハッジの客である著者に対しても、出むかえのクルド風のキスをする親しさも残っているのである。

〔B村の場合〕 シャイフ・アブディラ(登場人物9)の持ち村。著者によれば、クルド地域でもパーレヴィ国王によって農地改革がなされ、どんなクルド人の有力者でも、改革の上限である一人一村を越えて所有する人はいないという。そして、農地改革によって没収された自らの村の一つを、アブディラの父が買い戻し、その後アブディ

ラが金と将来を注ぎ込んできた村が、この村なのである。このため、水も豊かで最も灌漑設備も整っている村である。

この村にあるアブディラの家は、あたかも「スイスの村の家」のように、赤レンガ造りでバラの植えられた花壇や果樹園すら備わっている。台所にはドイツ製のガスレンジが並び、食事はテーブルでするのである。アイシヤがこの村に町から移ると決まってからは、レザイエの家にあった大半の家具が運ばれてきた。その後も著者が訪問するたびに、近代的な商品が増え、数台のカメラや8ミリまで彼は持っている。そして、アブディラが誇るように、無償の労働供与を農民に求めている。けれども、村の中では彼の家の豪華さだけが目立ち、車やトラクターのあるのも彼の家だけである。それだけでなく、水も豊かなこのB村の農民はA村の農民よりも貧しうであるし、著者に対して出向かえてキスもしないのである。

著者は、二つの村と農民の生活のあり方に、クルドの指導者の近代化に伴う二つの対応の型を見たといっても良いであろう。著者は、75年には一応の調査を終えて帰国の途についた。この帰国を決断させるのに大きな要因となった難民学校の反米主義の若い教師は、都市生活によって部族への所属がほとんど感じられない人物であった。また、78年再訪時に会ったハッジのおいは、テヘラン大学在学中にクルド人の娘ではなく、大学の同級生と結婚していた。著者は、こうしたクルド人の新しい世代の出現を感知しながらも、クルド人が伝統に根づき、力強く将来を切り開くことを期待している。

V

クルド人たちのあるものは、イラン・イラク・トルコ人との衝突や、あるいは、これらの諸国の政策変更によって、故郷を捨て国境を越えて移動しなければならなかった。本書の記述から、中東各国に分散して生活せざるをえない少数民族の生々しい体験と、少数民族問題の深刻さを読者は感じるであろう。

クルド族の最近の状況についても貴重なデータを集めた本書に、クルド地域における農業諸関係や社会構造について、より分析的な記述を求めることは望蜀の感がある。したがってここでは、本書の記述をもとにして、イラン革命後かなりの成果を得ているクルド人の自治権拡大運動の実態を考えるためには、評者として何が知りたいのかを述べるに留めたい。

第1に知りたいことは、イラクのクルド族に影響力を持ち、宗教的権威を持ったアブディラ(登場人物9)は、今日のイランのクルド運動に影響力を持つのであろうかという点である。彼のところに指示を仰ぎにきた「地方のムッラー」やクルド人指導者とはイランの人々ではなかったのではないだろうか。彼自身一種の難民であり、イランのクルド族に大きな影響力はもっていないように思われる。また、今日のイランのクルド運動の指導者は、クルド民主党のカセムロウと精神的指導者と称されるシャイフ・エディディン・ホセイニであるが、このホセイニの持つ宗教的権威はアブディラのセイエドに基づく宗教的権威と同じものなのかという点も興味深い。

第2に知りたいことは、ハッジ・イスマエル(登場人物10)、国王側に属した部族の族長(登場人物4、パルバーネの父など)や、逆に、ずっと反国王側に位置したシカーク族(p.121)の族長などをはじめ、それぞれ500~3000家族を擁してイランに存在する60のクルド各部族の族長(p.49)は、イラン革命後のクルド運動にどのように関与しているのかという点である。これらの族長は、クルド民主党の中にどのように、どれほど参加しているのだろうか。クルド民主党とは別にイラン革命後のクルド運動には弱いながらも、コマレ(毛沢東派)、クルド労働党からフェグイヤー・ハルク(少数派)などの左翼も加わっているが、こうした左翼勢力を支えるクルド人は、族長の支配原理を抜け出た者であるのかどうか、興味深い点である。

第3に知りたいことは、パーレビ国王の農地改革は族

長の権力基盤をどう変えたのか、さらに、イラン革命後に族長の権力基盤はどう変わったのかという点である。農地改革以前のクルド地域では、僻地を除けば大地主が多く、大地主の申告税額が低額であったため、この税額で算出した有償配布の土地価格が比較的安くなり、農地改革は一般的に好評であったという。はたしてそのとおりなのかなど、この地域での農地改革の実態が明らかにされる必要がある。

しかしながら、解明されるべき問題はこれだけでない。イラン革命後の79年6~7月に、パーレビ国王による農地改革に基づく土地所有関係をめぐって、地主と農民の衝突が発生した。クルド問題調査のためのホメイニ師の特使自ら、中央政府や革命警備隊が「地主、封建分子、旧体制の追従者に武器を供与している」(『テヘラン・タイムズ』79年10月19日)とさえ発言したのである。逆に、クルド民主党は農民を支持していると、同党筋は主張している。そして、これらの指摘が正しいとすれば、地主と農民の衝突が、中央政府と自治権拡大を求めるクルド族との衝突に転化していったことになる。はたしてこの真相はどうであろうか。

以上三つの点は、少数民族における族長原理とそれを支える社会構造が、イラン革命後、自治権拡大運動の中でどう変わり、どう生き続けるのかという問題に集約されよう。これらの問題は、日本ではまだ解明されようもしないで残されているのである。

(アジア経済研究所調査研究部 加納弘勝)